

研究分野	資源生態	部名	漁場環境部
研究課題名	アカイカ南下経路調査		
予算区分	県単		
試験研究実施年度・研究期間	H.13 ~ H.17		
担当	清藤 真樹		
協力・分担関係	(独) 北海道区水産研究所、遠洋区水産研究所		

<目的>

本県沖合漁業のアカイカは、基幹漁業のイカ釣漁業の中で重要度が非常に高い。アカイカの回遊経路については、北上期の調査は国・各道県の調査により予報の作成や、情報伝達が十分に行われているが、南下期の分布回遊については本県中型船の操業のみのため、十分な調査や情報伝達が行なれないまま今日に至ってきた。このことから、南下経路の解明とリアルタイムの分布状況の伝達により本県イカ釣漁業の経営安定に資することを目的に調査を行っている。

<試験研究方法>

- (1) 南下分布生態調査：試験船及び標本船の操業状況から魚群の動向及び生態を明らかにする。
- (2) 海洋構造把握調査：アカイカの分布、回遊は水温環境に大きく左右されるため、海況情報の収集を行い、環境と分布の関係を明らかにする。
- (3) 情報伝達手法開発試験：衛星回線を使用した伝達手段による、点だけでなく面の情報提供を実施する。

<結果の概要・要約>

試験船調査結果

試験船・開運丸、東奥丸で実施したアカイカ漁場調査及びアカイカ南下経路調査結果について、月別に図1～8に図示した。

太平洋海域における試験操業は、開運丸は北太平洋沖合い（東経170付近）で行った操業を除く東経155度以西海域では5航海54操業を行い、そのうちアカイカが漁獲されたのは46地点で釣獲地点率は83%であった。東奥丸は7航海49操業を行い、アカイカが漁獲された地点は16地点で、釣獲地点率は33%であった。目立ったのは、1月16日に北緯37°05′、東経141°50′で開運丸が記録したCPUE26.33、1月21日に北緯37°27′、東経142°12′開運丸が記録したCPUE26.21であった。

また、本格的に試験操業を行った10月以降でみると、昨年は53操業、釣獲地点率96%、通算CPUE4.906、今年54操業、釣獲地点率94%、通算CPUE2.652と釣獲地点率はかわらないもののCPUEは前年比の54%となった。

操業時のパンチング結果は冬・春生まれ群のものと考えられ、各月の最頻値は、8月は18cm、9月は24cm、10月は29cm、11月は33cm、12月は32cm、1月は38cmであった。9月から11月、1月は一つの群の成長に伴うモードの移行と考えられるが、12月に入ればらつきが見られた。

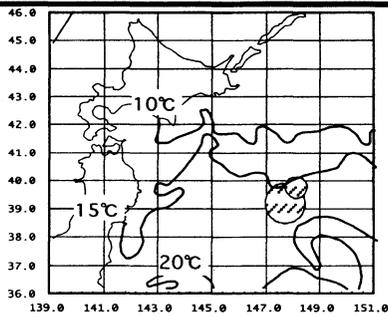


図1 開運丸 (6月)

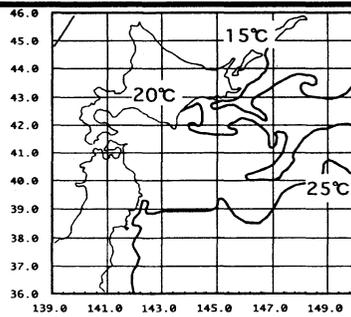


図2 東奥丸 (8月)

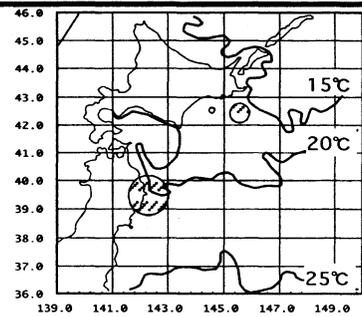


図3 東奥丸 (9月)

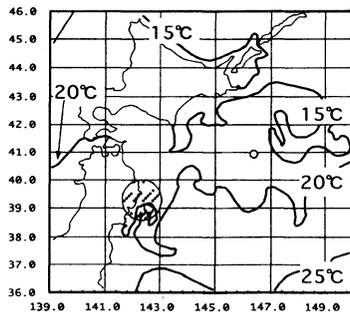


図4 開運丸、東奥丸 (10月)

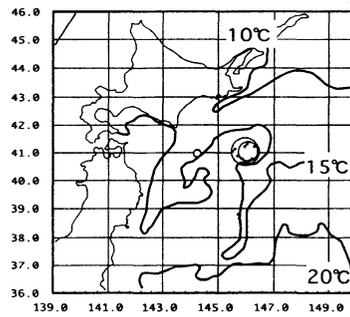


図5 開運丸、東奥丸 (11月)

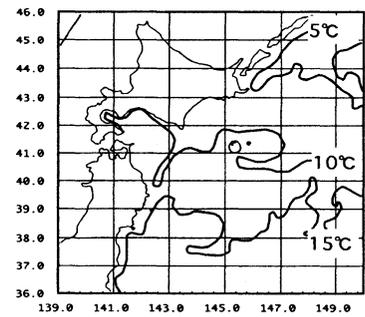


図6 開運丸 (12月)

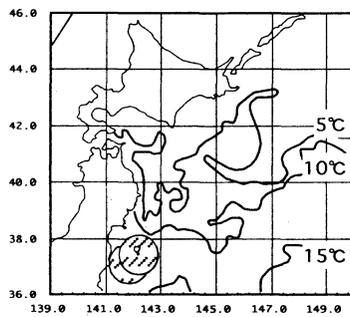


図7 開運丸、東奥丸 (1月)

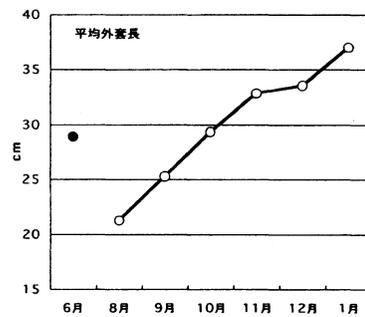


図8 パンチングからの平均外套長の推移

<今後の問題点>

10月から12月の漁場形成がなされなかったのは、東経150度以西への来遊量が少なかったとともにアカイカ回遊の3つの動態（北上期～混合域期～南下期）のうち、混合域期の期間が昨年より遅く、スルメイカから切り替える見極めとして、集約的漁場として利用可能な南下期が遅れたことが低調な漁獲につながったものと考えられる。混合域期の時期が移動する理由には海況と成長が考えられ、それぞれについての移行条件を解析する必要がある。

<次年度の具体的計画>

アカイカ漁場調査、アカイカ南下経路調査を統合し、新たにアカイカ未利用資源の開発調査事業の中で早期の回遊状況、動態等を調査することとしている。

<結果の発表・活用状況など>

平成17年度イカ釣り漁場開発調査資料31号